



中国の農業労働力の動向

国際領域主任研究官 明石光一郎

はじめに

2004年に中国の広東省珠江デルタ、長江デルタで工場労働者が不足し、給与が急速に上昇する事態が発生した。このような事態を中国では「民工荒」(荒は不足の意味)と呼び、農村からの出稼ぎ労働者不足を意味するようになっている。この事態を契機に中国の低賃金の労働者が不足し始めたのではないかという議論が起き始めた。

08年にアメリカ発のリーマンショックによる経済危機が生じると、中国の輸出産業も打撃を受け、多くのリストラが行われ、09年初頭には就職したくてもできない単純労働者が激増した。しかし中国経済のV字型回復により10年には再び民工不足となり、外資系企業を対象としたストライキが勃発するようになった。

今後とも農村からの安価な労働力をを利用して年率10%程度の経済成長が見込まれる中国経済における労働力の移動、特に農村から都市への移動に関する分析結果を紹介する。

1. 人口の動向

中国の総人口は年々増加し08年に13億28百万人になっているが、その人口増加率は毎年低下し続け、08年には0.51%にまで減少している。

90年から08年の間に都市の人口が3億02百万人から6億07百万人と倍増しているのに対し、その間の農村の人口は8億41百万人から7億21百万人と1億20百万人減少している。(第1,2表)

この間農村から都市へ毎年約900万人～1800万人の人口移動がある。改革・開放が始まった78年からの累積移動人口は08年には約3億7000万人にのぼっており、農村が都市労働力を供給してきた。(第3,4表)

また、この間の就業人口を見ると、都市では人口及び就業人口ともに増加傾向にあるが、就業人口比率は減少傾向にある。他方、農村では人口は減

少傾向にあるが、就業人口は90年から増加を続け、95年にピークをうった後、徐々に減少に転じてい

第1表 都市の就業人口及びその比率

単位：万人

	都市人口	都市就業人口	就業人口比
年	人口	人口	比率(%)
1990	30,195	17,041	56.44
1995	35,174	19,040	54.13
2000	45,906	23,151	50.43
2005	56,212	27,331	48.62
2006	57,706	28,310	49.06
2007	59,379	29,350	49.43
2008	60,667	30,210	49.80

資料：中国統計年鑑より計算。

第2表 農村の就業人口及びその比率

単位：万人

	農村人口	農村就業人口	就業人口比
年	人口	人口	比率(%)
1990	84,138	47,708	56.70
1995	85,947	49,025	57.04
2000	80,837	48,934	60.53
2005	74,544	48,494	65.05
2006	73,742	48,090	65.21
2007	72,750	47,640	65.48
2008	72,135	47,270	65.53

資料：中国統計年鑑より計算。

第3表 都市、農村人口及び毎年移動人口

単位：万人

	都市人口	
年	年末	都市毎年流入人口
1991	31,203	614
1995	35,174	643
2000	45,906	1,825
2005	56,212	1,608
2006	57,706	1,197
2007	59,379	1,374
2008	60,667	986

資料：中国統計年鑑より計算。

注：1990年以降の人口移動のみを対象。

第4表 都市流入人口累積値

単位：万人

	都市流入人口累積値
年	1978年基準
1980	1,457
1985	6,131
1990	9,712
1995	13,475
2000	23,200
2005	32,787
2006	34,157
2007	35,708
2008	36,875

資料：中国統計年鑑より計算。

る。しかしながら、注目すべきは、人口の減少ほどは就業人口が減少していないことである。(第1,2表)

のことから農村が多くの労働力を都市に供給する過程で、農村内で中高年者を中心として労働力の補充を行ってきたものと推測できるが、既に中国では、若年人口比率の低下と高齢者人口比率の上昇が生じており、今後も農村の人口流出が都市の労働不足を補うことができるかどうかは疑問である。

2. 農村の労働生産性の比較

(1) 中国国内の地域別比較

地域別の農業労働生産性と労働当たり機械投入量(農業機械の馬力を電力量で換算、1KW = 746HP)の両指標はともに顕著に上昇し、95年から05年にかけて、労働生産性、労働当たり機械投入量ともに約2倍に上昇している。しかしながら、地域ごとの所得水準や栽培作物の違い等からこれら指標は地域別に差異が見られ、労働生産性について見れば、東部は中国平均よりも高く、中部は平均とほぼ同じであり、西部は平均より低い。(第5,6表)

また、その伸び率についても地域別に相当の差異が見られる。

(2) 國際比較

農業の労働生産性について中国特有のものかアジア諸国共通のものか検証するために、FAOの統計を使用し中国同様莫大な人口をかかえるインド、緑の革命によりアジアの成功国とされるタイとの比較を行う。(FAOの用語で「農業」という言葉が使用されているが、厳密には第1次産業のことである。またデータは02年までしか採取できなかった。)

中国の労働生産性は78年には3カ国で最も低かったが、その後上昇してインドを追い越し、タイと遜色のない水準にまでなっている。また、土地生産性も78年には3カ国で最も低かったが、上昇しインドへのキャッチアップを果たしている。この間で中国の土地・労働比は変化していないことから、労働生産性上昇は単位面積当たりの肥料投入量の増加による土地生産性の上昇に帰せられる。

単位面積当たり肥料投入量は中国、インド、タイともに大幅に増加した。

労働者当たりトラクター台数も、中国は4倍に、インドは3倍以上に、タイは10倍以上にと大幅に増加している。(第7,8,9,10表)

3. まとめ

中国農業における労働生産性は徐々に上昇しつつあるが、今後の機械化の進展によっては、さらに上昇するものと考えられる。従って、こうした農業の労働生産性の上昇とともに、農村では、過剰労働力が引き続き生み出されることになる。すなわち、農村では潜在的失業者が滞留し続けることとなり、農村での労働力の枯渇という事態は、当分の間生じることはないものと考えられる。

ただし、中国では高齢化が進展しており、若年人口が減少している事実を考慮すると、今後農村から移動の可能性がある労働者は、都市、特に企業が期待している若年労働者であるとは限らないのである。

第5表 労働生産性

年次	単位：(万元／人)			
	東部	中部	西部	平均
1990	0.29	0.26	0.17	0.24
1995	0.40	0.36	0.23	0.35
2000	0.45	0.39	0.29	0.39
2005	0.80	0.71	0.51	0.68

資料：中国統計年鑑。

第6表 労働当たり機械投入量

年次	単位：(KW／人)			
	東部	中部	西部	平均
1990	1.19	1.02	0.52	0.96
1995	1.62	1.35	0.67	1.27
2000	2.34	1.95	0.96	1.83
2005	3.31	2.84	1.41	2.64

資料：中国統計年鑑。

第7表 労働生産性

年	単位：(WU／人)		
	中国	インド	タイ
1978	1.23	1.33	2.37
1980	1.26	1.27	2.34
1985	1.55	1.53	2.52
1990	1.74	1.73	2.42
1995	2.24	1.85	2.83
2000	2.81	1.98	3.05
2001	2.91	2.02	3.22
2002	3.06	1.88	3.26

資料：FAOSTAT より計算。

第8表 土地生産性

年次	単位：(WU／ha)		
	中国	インド	タイ
1978	1.17	1.49	2.16
1980	1.18	1.48	2.14
1985	1.39	1.86	2.30
1990	1.61	2.19	2.25
1995	2.12	2.52	2.72
2000	2.62	2.88	3.12
2001	2.68	2.97	3.27
2002	2.82	2.80	3.29

資料：FAOSTAT より計算。

第9表 土地当たり肥料投入量

年次	単位：(kg／ha)		
	中国	インド	タイ
1978	26	28	16
1980	35	31	15
1985	35	48	22
1990	51	66	49
1995	67	77	71
2000	62	92	78
2001	64	96	84
2002	71	89	84

資料：FAOSTAT より計算。

第10表 労働者当たりトラクター台数

年次	単位：(台／千人)		
	中国	インド	タイ
1978	2.3	1.7	0.8
1980	3.1	1.8	1.0
1985	4.3	2.8	1.7
1990	5.4	4.3	2.9
1995	5.7	5.5	7.3
2000	8.9	5.8	10.7
2001	8.5	5.7	10.8
2002	9.2	5.6	10.8

資料：FAOSTAT より計算。

中国のみ中国統計年鑑。

注：FAOのデータでは中国の小型トラクターの値が掲載されていないため、中国統計年鑑を使用した。大型と小型の馬力換算調整すみ。